

小児悪性新生物長期生存患者登録にみる 小児白血病患児の生活の質について

(分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究)

別 所 文 雄

要約：小児悪性新生物長期生存患者登録（以下長期生存登録と略す）には、1980年の開始以来343例の白血病患者が登録されている。この登録患者について自覚的および他覚的な障害の所有率、身長発育、初潮年齢などについて検討した。急性リンパ球性白血病では急性非リンパ球性白血病に比し頭頸部に関する異常が多く、逆に後者ではその他の肉体的異常の割合が多かった。初潮発来の平均年齢は正常女児並であったが発来の早い例の割合が多かった。身長分布は正常並であった。

見出し語：長期生存患者登録、晩期障害、身長発育、初潮年齢、生活の質

小児悪性新生物長期生存患者登録（以下長期生存登録と略す）には、1980年の開始以来343例の白血病患者が登録されている。この登録患者について自覚的および他覚的な障害の所有率、身長発育、初潮年齢などについて検討した。

(1) 対象と方法

全白血病登録患者343例について、コンピューターに入力されているデータの1部を出力し、自覚的および他覚的な障害の所有率の計算、診断時および登録票記載時の身長の各年齢の平均値を用いた成長曲線の作製、初潮年齢分布の検討などを行った。

(2) 結 果

登録患者の診断時期は、最も古い症例は1963年5月、最も新しい症例は1983年10月であった。

(a) 登録例の白血病の型の分布

白血病の型の分布では、当然ながら急性リンパ球性白血病の占める割合が相対的に大きかった。

(b) 障害の所有率

症例数の多い急性リンパ球性白血病（ALL）と急性非リンパ球性白血病（ANLL）とについて異常を有する症例の割合を障害の部位別にみた。

ALLに比しANLLでは、頭頸部の異常を除いて種々の肉体的異常を有する症例の割合が高く、休学したことのある症例が多いのに対して、ALLでは頭頸部の異常、視力・聴覚障害が多くみられた。

東京大学小児科（Department of Pediatrics, University of Tokyo）

(c) 初潮発来年齢分布

初潮に関して記載のあった59例について初潮の発来した年齢の分布を見ると、平均初潮発来年齢は12歳4カ月であり、19歳代で発来した1例を除くと12歳2カ月であった。また12例が11歳未満で発来を見た。

(d) 身長分布

診断時および登録票記載時の年齢毎に身長の平均値を標準成長曲線上にプロットしてみると、男女とも診断時、登録票記載時の如何にかかわらず、各年齢の身長の平均値の曲線はほぼ標準曲線の平均値 ± 1 SD以内に納まっていた。

(3) 考察

ALLに比しANLLにおいて頭頸部を除く種々の肉体的異常が多く、また休学経験が多いことはANLLの治療がより過酷なものであることを考えれば理解できることである。頭頸部の異常と視力・聴力障害とがALLにおいて多いのは中枢神経系白血病の予防のための頭蓋放射線照射の影響として理解可能である。この確認のためには異常の具体的な内容と治療内容について個々の症例の登録票を参照する必要がある。

初潮年齢は発来の平均年齢では玉田の報告(12.3歳)¹⁾とほぼ同じであるが、11歳以下の初潮発来例が12例も存在すること、一見すると分布が2峰性であるような印象があることなどは、症例が少ないことによる偏りのためであるのか真の現象であるのか更に症例を集めて検討する必要がある。また、治療のために月経を永久にみない症例も存在するはずであり、各年齢迄の症例の中で、その年齢までに初潮を発来した症例の割合を見る必要もある。

身長平均がほぼ標準平均身長の1標準偏差内に納まってしまふことはある意味では見事と言わざるを得ない。個々の症例を検討すると、身長発育の遅れのある症例が存在することは確かであるが、多数例の平均でみると、症例間のバラつきが大きいためその差が明らかにならないものと思われる。

文献

1. 玉田太朗：思春期の内分泌。日内分泌会誌 54：1331-1340, 1978.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児悪性新生物長期生存患者登録(以下長期生存登録と略す)には,1980年の開始以来343例の白血病患者が登録されている。この登録患者について自覚的および他覚的な障害の所有率,身長発育,初潮年齢などについて検討した。急性リンパ球性白血病では急性非リンパ球性白血病に比し頭頸部に関する異常が多く,逆に後者ではその他の肉体的異常の割合が多かった。初潮発来の平均年齢は正常女児並であったが発来の早い例の割合が多かった。身長分布は正常並であった。